

## 目 次

平成２９年度	狩野川水系水質保全協議会 事業報告	2
平成２９年度	「環境にやさしい技術研修会」実施報告	3
平成２９年度	環境講演会 開催報告	4
平成２９年度	水生生物観察会 実施状況	5
平成２９年度	水生生物調査結果	6～7
平成２９年度	水生生物観察会に参加して〈作文〉	
	三島市立北小学校３年	野上 耀 8
	清水町立西小学校４年	尾崎 修磨 9
	函南町立函南東小学校５年	加納 花夏 10
	裾野市	辰己 結栴 11
平成２９年度	狩野川支川別ＢＯＤの状況	12～15
平成２９年度	河川美化功労者表彰	16

## 会議

## 総会

期 日：平成29年5月18日(金)13時30分～ 場 所：みしまプラザホテル7階 マリアソーレ  
参加者：36名

案 件：次の案件を審議し、原案どおり承認可決された。

- ① 平成28年度事業報告及び収支決算報告について
- ② 平成29年度事業計画案及び収支予算案について

## 幹事会

〈第1回幹事会〉

期 日：平成29年4月14日(金)13時30分～ 場 所：三島市役所中央町別館4階 第1会議室  
出席者：17名

- 案 件： ① 平成28年度 事業報告、収支決算報告、監査報告について  
② 平成29年度 事業計画(案)、収支予算(案)について  
③ 平成29年度 河川美化功労者表彰について  
④ 平成29年度 総会について

〈第2回幹事会〉

期 日：平成30年2月13日(火)(文書により) 案 件：河川美化功労者の推薦について

## その他の会議

〈第1回事務担当者会議〉

期 日：平成29年6月9日(金)15時00分～ 場 所：三島市役所本館2階 第2会議室  
出席者：8名

- 案 件： ① 水生生物観察会の開催について  
② 水生生物調査実技研修会について  
③ 技術研修会について  
④ 環境講演会について  
⑤ 会報狩野川の原稿について  
⑥ 負担金について  
⑦ 50周年記念事業について

〈水生生物調査実技研修会〉

期 日：平成29年6月13日(火)13時25分～ 場 所：長泉町 桃沢野外活動センター  
参加者：21名

内 容：① 水生生物の採取方法について ② 水質階級の判定について

## 河川美化運動

## 第28回 水生生物観察会の開催

水辺へ触れ合い、水質浄化意識の高揚を図ることを目的として、9市町で水生生物観察会を開催した。

期 日：平成29年7月7日(金)～8月2日(水) 調査地点：7河川10地点 参加者：250名

## 講演会・相互技術研修会

## 環境講演会

三島地区環境保全推進協議会との共催で、環境講演会を開催した。

期 日：平成29年11月2日(木)13時30分～ 場 所：三島市民生涯学習センター 3階講義室  
参加者：105名

講 師：国立環境研究所 地球環境研究センター気候変動リスク評価研究室 室長 江守 正多 氏  
演 題：「地球温暖化と私たちの未来」

## 技術研修会

環境講演会を実施した。

期 日：平成30年2月9日(金)14時00分～

場 所：三島市民生涯学習センター 3階 講義室

講 師：味の素株式会社 グローバルコミュニケーション部 CSRグループ長 長谷川 泰伸 氏

演 題：味の素グループの事業による社会課題の解決

参加者：27名

## 会報発行

協議会事業への理解を深めるため、会報「狩野川」第49号を発行した。

平成29年度

## 「環境にやさしい技術研修会」実施報告

内 容	環境保全活動事例の紹介
講 師	味の素株式会社 グローバルコミュニケーション部 CSR グループ長 長谷川 泰伸 氏
日 時	平成30年2月9日（金）14時00分～16時00分
場 所	三島市民生涯学習センター 3階 講義室（三島市大宮町1-8-38）
参加者	27名
演 題	「味の素グループの事業による社会課題の解決」

味の素株式会社は、「単なる科学の発見ではなく、世の中に役に立つようにしたい」、「国民の栄養不良を矯救し、日本人の体位向上に貢献したい」という創業者たちの志を大切にしており、「Eat well, Live well.」を企業スローガンとして、おいしく食べて健康づくりをモットーに活動しています。また、これらの活動は、国際的に定められたSDGs（持続可能な開発目標）を達成することも目指しており、社会価値と経済価値の両方を加味して、共通価値を創出することとしています。



味の素グループが考える、解決すべき21世紀の人類社会の課題は、「ひと、生き物、地球のSustainability」であり、地球の持続性、食資源及び健康な生活を確保するために、どのような取り組みをしているかを簡単に紹介したいと思います。そもそも、弊社が販売している味の素は何かを説明しますと、味の素は、人間が持っている基本5味の内の「うま味」に働きかける作用を持つグルタミン酸を主成分とする商品です。弊社では、このグルタミン酸を主成分とする商品について、「ほんだし」のコンセプトをグローバルに展開することとしています。「ほんだし」のコンセプトは、日本であれば、古くから鰹節による出汁を料理に活かしてきたように、各地の食文化の出汁をもとにしたうま味調味料を作り、それぞれの食文化を守りながら、より美味しい料理を作ることです。

弊社が持続可能な開発を行うためには、弊社の主商品の原料となる鰹が安定して漁獲される必要があります。このため、弊社では、水産庁を中心とした鰹資源調査計画全体の中で、弊社の共同事業として、黒潮本流源流域の鰹の生態調査を行っています。本調査を行うにあたり、近隣の漁師の協力は必要不可欠です。鰹の生態調査を行うために、鰹を捕獲した後に、アーカイバルタグと呼ばれる識別装置を取り付け、再び放流しています。そして、放流後、再び漁師によって捕獲された鰹にタグが付いていた場合、弊社に連絡が来ることになっており、タグを回収後、取り付けた鰹の移動範囲等を知ることができる仕組みを整え、本調査結果により、鰹の北上ルートが推定されました。従来、鰹は黒潮に乗って長い距離を北上すると考えられていましたが、長い距離を北上する鰹は稀であり、4つ程の定められた短いルートの中で回遊する鰹がほとんどであることが判明しました。

この他にも、弊社が考える課題を解決するために、川崎市と協力してイベントを開催したり、バイオサイクルを確立することにより、再資源化率99%以上を維持する等、様々な事項に取り組んでいます。

テーマ 「地球温暖化と私たちの未来」  
講 師 国立環境研究所 地球環境研究センター  
気候変動リスク評価研究室 室長 江守 正多 氏  
日 時 平成29年11月2日(木) 13時30分～15時15分  
場 所 三島市民生涯学習センター 3階 講義室  
参加者 105名

日本は現在、地球温暖化が進んでおり、現在の状態が2050年まで続くと、8月の最高気温は40℃以上になり、真夏日や熱帯夜は連続50日以上も続くという予測が立てられています。地球温暖化の仕組みを簡単に説明すると、地球は太陽から熱エネルギーをもらって活動をしています。地球は、この熱エネルギーを保持する能力があり、この能力を温室効果と言います。そして、この温室効果が強まると地球温暖化が進みます。



近年の世界平均気温の変化傾向を調査したところ、1970年から2000年にかけて、0.5℃程度上昇していることが示唆され、2016年には、0.8℃程度上昇していることがわかりました。また、コンピューターを用いたシミュレーションによる調査を行ったところ、20世紀半ば以降の世界平均気温上昇の半分以上は人為起源の要因による可能性が極めて高いことも判明しています。これらの結果を踏まえて、100年後の気温上昇量を予測すると、4.0℃程度上昇するとされており、これに伴って、100年後の海面水位上昇量は0.8m程度上昇すると言われています。

地球温暖化には8つの主要なリスクがあり、そのリスクとは、「海面上昇、洪水、台風、熱波、食糧不足、海の生態系の損失、陸の生態系の損失」です。これらのリスクに対して、我々は多かれ少なかれ適応策を実施する必要があり、社会の強靱さを向上すると共に、特に途上国の開発のための政策に適応策を組み込むことが重要とされています。

2015年に締結された、気候変動枠組条約COP21パリ協定では、「世界的な平均気温上昇を産業革命以前に比べて2℃より十分低く保つとともに、1.5℃に抑える努力を追及する」ことが決定されました。そして、この「2℃未満」目標を達成するために、「今世紀後半に人為的な温室効果ガスの排出と吸収源による除去の均衡を達成する」ことが決定しました。この他にも2015年には様々な動きがあり、エルマウG7サミットでは2100年までに世界経済を「脱炭素化」することが、また、ローマ法王の「回勅」では文化的な大革命が必要であることが表明されました。

気候変動対策については、日本人のおよそ6割の人が生活の質を脅かすものであると考えている調査結果があります。しかし、世界では反対に、6割強の人が、生活の質を高めるものであると考えており、日本で気候変動対策を行うためには、最初に我々日本人の意識を変えることから始めなければなりません。そもそも、「脱炭素化」は、イヤイヤ努力して達成できる目標ではなく、社会の「大転換」が起きる必要があると考えています。「大転換」とは、科学的な知見を基に、倫理観や制度を整え、経済への影響を加味しながら、新技術の開発、普及により、全ての人により良い生活を過ごすことができるようにすることを言います。そしてこの大転換を達成するためには、我慢や辛抱を強要するのではなく、マナーの問題として、「脱炭素化」が常識となるように進めていく必要があるのではないかと思います。

最後に、本講演会を通じて一番伝えたいこととしては、人類は「化石燃料文明」を卒業しようとしていることです。少し前までは、化石燃料が枯渇する心配をしていましたが、最近では、「たくさん余っているのに使うのをやめる」ことを目指し始めたので、皆さんも気候変動対策を意識してみてもいいと思います。